

飼育下におけるクサガメの繁殖生態

竹田正義

670-0971 兵庫県姫路市西延末440 姫路市立水族館

Breeding ecology of *Mauremys reevesii* in captivity.

By Masayoshi TAKEDA

Himeji City Aquarium, 440 Nishinobusue, Himeji, Hyogo 670-0971, Japan

クサガメの繁殖生態に関しては過去に多くの報告があるが、未解明な部分も多い。姫路市立水族館では、1976年より飼育下におけるクサガメの産卵調査(以下、産卵調査)を行い、膨大な数の産卵情報を記録してきた。2016年からは個体を識別した産卵調査(以下、個体別産卵調査)により詳しい情報を記録するとともに、2019年からは幼体の這い出しに関する調査(以下、這い出し調査)を行っている。今回、クサガメの繁殖生態に関するこれらの調査から得られた知見をとりまとめ報告する。

産卵調査では、1976年～2022年にかけての各年の産卵期間を求め、1970年代～2020年代における産卵期間の変化を分析した。個体別産卵調査では、個体識別したメス15個体(図1)を対象に産卵調査を行い、2016年～2022年にかけての記録からクラッチ数、年間産卵回数および産卵間隔を求めた。這い出し調査では、2019年～2023年にかけての記録から、ふ化幼体が地表に這い出るまでの日数(以下、這い出し日数)を求めた。

産卵調査の結果、産卵期間は平均73日(範囲: 55日～94日)で、次第に長期化する傾向が見られた。各年代の平均産卵期間を比較すると、1970年代が67日だったのに対し2020年代が91日で約1.4倍に長期化していた。このような産卵期間の長期化はニホンイシガメやミシシippアカミガメでも見られ、いずれの場合も温暖化を背景とした平均気温の上昇が影響していると考えられる(竹田, 未発表)。個体別産卵調査の結果、計138回の産卵を記録した。クラッチ数は平均9.1個(範囲: 1個～21個)、年間産卵回数は平均2.2回(範囲: 1回～5

回)であった。産卵間隔は産卵回数が増すにつれて短くなる傾向が見られた。このような傾向は、飼育下における個体の栄養状態がひとつの要因と考えられる(竹田, 未発表)。這い出し調査の結果、10巢で幼体の這い出しを確認した(図2)。このうち、産卵した年のうちに這い出した産卵巣は5巢で、這い出し日数は平均100日(範囲: 86日～112日)、産卵した翌年の春に這い出した産卵巣は5巢で、這い出し日数は平均241日(範囲: 222日～281日)であった。産卵日と這い出し時期について見ると、5月～6月の産卵巣ではその年のうちに幼体が這い出し、7月以降の産卵巣では翌年の春に這い出る傾向にあった。これらの調査により、飼育下におけるクサガメの産卵期間、クラッチ数、産卵回数、産卵間隔および這い出し時期に関する知見が得られた。



図1. 背甲にマーキングを施した調査対象個体



図2. 地表に這い出したクサガメの幼体(2021/10/19撮影)